

## グリーン・ツーリズムと体験型観光

【日時】	2011/09/18 15:00~17:00
【場所】	高知大学国際・地域連携センター セミナー室
【参加者】	15名 (うち学生2名)
【問題提供者】	山崎 真弓 (研究員)
【コーディネーター】	国光 ゆかり (人と地域の研究所 所長)

### 第1部 問題提起 BY 山崎真弓さん

#### ■グリーン・ツーリズムについて

グリーン・ツーリズムは、農林水産省の定義によると「緑豊かな農山漁村において、交流を楽しむ滞在型の余暇活動」。

昔も農家民宿はあったが、(スキー民宿のようにスキーが主目的であって)農家にわざわざ泊まりにくる人は少なかった。現在は農家に泊まること＝グリーン・ツーリズムのニーズが大きくなっている。

#### ■農山漁村での教育について

平成20年から「子ども農山村交流プロジェクト」という、農山漁村で子供たちを受け入れてもらう取り組みが行われている。農山漁村・農林漁家での体験の教育効果はとて高い。実際に2,3ケースに同行したが、受け入れ前と後で子どもの様子が見るからに違う。それらが今の教育旅行というニーズにつながっていく。

経済的に可能ならば行かせたいと思う都会の親御さんは相当数いる(実際に子どもプロジェクトが始まる前から都会の私立高校や小学校、学習塾が農山漁村体験型学習に高知に来ていた)。

もともと発祥は、財政状態が良い武蔵野市。一人あたり2千円の予算をつけて積極的にやっている。国では農林水産省、文部科学省、総務省の連携事業として補助金をつけて推進してきた。しかし、この前の事業仕分けで切られてしまった。

このプロジェクトには予算を含め、行政の後押しが不可欠である。自治体によって取り組みに温度差があり、四国4県で言えば、他3県が積極的だが高知県は消極的。

#### ■グリーン・ツーリズムの現状 (農山漁村側から見たグリーン・ツーリズム)

グリーン・ツーリズムは中山間の地域振興計画においては定番。「都市農村交流」という表現で書かれている場合もある。

第三次全国総合開発計画では、「農山漁村の過疎化は国土の管理主体（農山漁村の住人）を失うことで国土の荒廃をもたらし、国土保全の観点からも対応を迫られている」と言われており、過疎化の対応は重要。それは、最近の大雨などの被害を見てもわかる。

第四次全国総合開発計画では、国土保全の観点だけでなく、余暇活動、教育的機能などを含めた「農山漁村の持つ多面的役割」と定義を変えている、

## ■グリーン・ツーリズムの歴史

### ・国土計画の中でのグリーン・ツーリズム

1998	グリーン・ツーリズムという言葉が初めて国土計画に現れる。
2007	観光立国推進基本計画内で旅行需要の創出の観点から重要とされている。
2008	国土形成計画で「農林漁家民宿」という言葉が出てくる。農山漁村活性化のため拡大を促進する。農林水産省（受け入れ側）の目線からの推進となる。

### ・農業白書内では

1978	都市と農村に関する記述が登場。
1982	都市農村交流という記述が登場。
1983	都市と農村の交流を通じたむらづくり・まちづくり という表現になる。
1990から	「都市と農村の交流」という記述が連続して出てくる。
1992	農山漁村の衰退や、ガット・ウルグアイラウンドの受け入れを背景に、「新しい食料・農業・農村政策の方向」の中で「グリーン・ツーリズム」という言葉が登場。 1990年以前から、ヨーロッパでの取り組みをレポートや留学・派遣などから積極的に情報収集をして、グリーン・ツーリズムを輸入した形。

### ・観光業としては

1960年代	農山漁村は観光の対象とは認識されていなかった。
1970年代	レジャーが盛り上がり、農村でスキー民宿が増加。それに伴い、農村観光が始まる。
1980年代	市民農園が制度化される。観光農園の開業。国庫補助事業で宿泊施設や体験施設の整備。このあたりがグリーン・ツーリズムなのかどうか判断が難しい。
1990年代	バブル崩壊を機に、レジャーが減速。この時、国庫補助金で作られたこの手の民宿の3-4割が赤字を出す。本来ならば改善命令を出さないといけないが、民家であるということがジレンマ。 今後、スキー民宿がグリーン・ツーリズムに姿を変えていく。

このように、農林水産省がグリーン・ツーリズムを推進し始める 1992 年以前にもグリーン・ツーリズムの芽生えはあった。

それを、今のグリーン・ツーリズムと区別して「農村観光」と呼ぶ。現在のグリーン・ツーリズムの問題は、すでに農村観光の時代にも発生していた。それは、農村観光は農村を立て直す手立てとなるのか、また、農村観光の容量は限界ではないのか、という2つの問いである。

■「グリーン・ツーリズム」はヨーロッパからの輸入

日本では、農産物直売所・観光果樹園・市民農園・教育・体験型観光での農産物収穫体験など、とても広い意味で使用される。対してヨーロッパでは、ほとんど農家民宿だけである。この差異はどこから来るのか。

	日本	ヨーロッパ
形態	直売所、果樹園、教育など幅広い意味を持つ。	ほとんど農家民宿だけ。
歴史	農村振興策として、ヨーロッパから学ぶ。	農作物の価格指示政策によって、自給率が上がり、輸出できるほどになった。それと同時に、環境破壊、景観の維持がいかに問題となるかを気づいていた。
前提条件	不景気で苦しくなった地域住民（農林漁家）の生活のため導入。	高い農業生産を前提として、所得向上のためグリーン・ツーリズムを導入。
課題	<ul style="list-style-type: none"> <li>・旅館法の融通が効かない。</li> <li>・長期休暇制度がない。</li> <li>・農山村を維持するという国民的な合意が足りない。</li> </ul>	

このように、前提条件が大きく違うため、そのままグリーン・ツーリズムを輸入してもうまくいかない。そのため、国の主要機関が考えて日本型グリーン・ツーリズムを定義した。

■日本型グリーン・ツーリズムの特徴と課題

特徴

- ・長期休暇は厳しいので、日帰りもあり。
- ・交流や直売など相互理解もありにして、多様な形態を認める。
- ・体験主義
- ・交流重視

課題

- ・持続可能性がない。
- ・打ち出せるものがない。
- ・産業との関係性をどうするか明示されていない。

## ■農林漁家民宿の持続可能性について

上記の課題の中の、特に持続可能性について考える。持続可能性には、精神的なモチベーションと経済的な採算性が必要。アンケート調査の結果、精神的なモチベーションは以下のようなものであると分かった。

- ・自分自身の好ましい変化
- ・家族、都市からの支持認知

## ■旅行者の反応。

フランスの農家民宿での過ごし方の希望のアンケート調査では、トップ：何もしない、2位：散歩、3位：読書という結果であった。対して日本では、農山漁村という財の享受能力が醸成されておらず、体験プログラムを求める。特に近年は自分で楽しむ力が低下してきているようで、例えばカヌーに乗りに来て、増水でカヌーができないとなった時、他の楽しみを自分で見つけることができない（ただ座って川を見ている）方も見られるという。

農家民宿に電話をして「何を体験させてくれるか」と聞く方も目立つ。「お金を払うとどれだけの満足を得られる」というイメージがある。

そういう質問に戸惑う民宿の経営者もいるので、「うちにはプログラムはありません。その代わりに、本物の農家です。前来た方はとてもよろこんで帰られましたよ」と言ってみたら、とアドバイスしたこともある。

## ■教育型旅行の事例

体験型の修学旅行のようなもの。グリーン・ツーリズムの対極にある教育型旅行。

徳島県三好市にある「そらの郷 山里物語」(<http://www.soranosato.jp/>)

- ・夕飯の材料の調達、収穫。
- ・そば米雑炊づくり、こんにゃくづくり、しいたけ収穫。
- ・宿泊先は本物の普通の農家。（旅館業ではない。旅館業法上、こういった泊め方ができるかは県によって取り扱いが違う）

体験の価格（個別に価格がついている）＋宿泊料で、子供1人1日あたり約10000円。半年ほどの間に子供5人を12回受け入れて60万円の収入。農家にとっては本当に大きい現金収入。そのため、この地域では非常に意欲的に多くの農家が参加している。

（※補足：今、全国的にこのような農山漁村での教育旅行を推し進める動きがある。）

## ■高知県での農林漁家民宿

高知県の農林漁家民宿は、1泊6000円～8000円ほど。営業許可をとってプロとしてやっている。

## ■農林漁村の多様化

グリーン・ツーリズムは、元々農林漁村を支えるためのものであったはず。それが叶えられる

のであれば、体験型でも人間のふれあい、どちらかでなければならぬ、というものではない。

農林漁家民宿がもたらす変化は、自分だけでなく、地域の変化や都市住民の変化ももたらす。軸を固定しないあり方を探ることが必要と考える。

イギリス農政では、農林業生産（モノづくり）だけではない色々な農山村のあり方や経済活動を Diversification（多様化）と名づけ、推進している。もともと大工ができ、農作物ができて、あれができてこれができての「百姓」だったのでその方向に変化することはむしろ元の姿に近いということもできる。

（※補足：農業経営が単一作物の栽培に特化する傾向は、現代になってからの短期間のできごとにすぎない。）

#### ■最後の問いかけ

グリーン・ツーリズムと今ブームになっている体験型観光は違うのか？ 同じか？

## 第2部 参加者による、ひとこと感想

▼つい最近、牧場でのインターンシップに行ってきた。経営者の話でも、1番に出てくるのは経済的問題であった。この問題の解決は難しいと感じた。

▼スキーブームの最中に育ち、スキーが大好きに。あの時、グリーン・ツーリズムをやっていたということになる……。

▼昨年「みどりのふるさと協力隊」に参加。今年も引き続きその場所に住んで仕事をしている。「グリーン・ツーリズム」は広い意味だと感じたし、体験型観光と一緒にするのは違うと感じた。

▼オーストラリア育ち。エコツーリズムをする人になりたいと思っていた。オーストラリアでは一緒に色んなことをして、年上の人に教えてもらうというのが基本。どちらかという知恵を豊かにすることと、楽しむことが重要。

昨日まで林業を体験してきた。それは体験型観光と言うよりも、自衛隊みたいなハードな活動。楽しいと言うより、後々良かったと気づく性質のものだった。そういう活動もいい。

話の中で出た「今の人々は、感動をお金で買う」というのが面白い。お金と感動は絡んでいないのでは。子供に「今から楽しく遊べ」と言っても遊べない。感動は自然に生まれるものだと思う。

▼生まれが田舎。しかし企業でのサラリーマン生活だったため、今日のような話題に関心はなかった。最近、地域の活性化、過疎地の活性化に目を向けなきゃいけないと思っている。徳島の神山町に行ったり、メディアでぽっちり堂や烏骨鶏、ラフティングを見る機会があったり、棚田の火まつりに行ったり、地域に触れる機会が結構ある。今日はいい勉強をしたい。

▼外国育ちなので、日本の田舎は新鮮で好き。日本はいなか向けではなく都会向け、世界に向けて発信して、観光として色んな人に触れてもらうのが大事かなと思う。感動はお金では買えないので、学びという形で紹介していきたい。

▼昨年、「緑のふるさと協力隊」に参加。その際、教育旅行として千葉県の小学6年生を受け入れた。先生方が色々な体験をさせたいとびっしり予定を決めた。私個人としては、グリーン・ツーリズムの中に体験型観光があると思う。

▼実家が干物屋。重要文化財の建物であり観光名所。干物づくり体験も始めた。昔は観光客の方は自由に動いていたのに、最近はツアーなど団体で固まって移動している印象がある。自分はいなかは適当に歩いているだけで満足。なので、体験がないと過ごせないというのは不自由に感じる。矛盾しているかもしれないが「何もしない」ということを能動的にPRしたい。

▼実家はレンコン農家。現在はいなかインターンシップのコーディネートをしている。受け入れ先には、農家民宿をやっている方もいれば、農業の会社をやっているところもある。それぞれの良い点を引き出して繋げる、ということをやっている。グリーン・ツーリズムとは近い現場ではあるし、都市農村交流の予算も活用していたので繋がりを感じる。農山村に人も減っているが、お客さんとなる都会も人口が減っている。前提が全然変わっているので、他の物も全体的に捉え直していくところに来ているのではと思う。

▼この夏、信州に森林セラピーを体験しに行った。本当は散歩とか読書とかのんびりしたかったけど、日本では休みが少ないのでそのんびりできない。

▼いなかでのインターンシップ事業を進めているが、「インターンシップ」という名前がついていることに対する疑問がある。「働き、学び、交流する」というキャッチフレーズをつけているが、今日の話聞いて、これもグリーン・ツーリズムかと感じた。グリーン・ツーリズムはまだ20年弱くらいしか歴史がないし、今やっている人たちがその概念と内容を創っていく時期かと思う。

▼「ツーリズム」に出会ったのは、ブルーツーリズムが最初。10年ほど前に、そういう活動をしている知床の方と出会った。最初からブルーツーリズムって何だろうという疑問がある時に、環境省の「エコツーリズム」の定義を見た。そちらの方が日本の田舎にはあっている気がする。

### 第3部 フリートーク

「グリーン・ツーリズム」とは何ぞや、という話から、どんなグリーン・ツーリズムであればいいのか……など、自由に議論が交わされた。その中からいくつかを紹介する。

\*いなか人に人を呼ばなければならない理由は2つある。1つは高知には製造業がなく観光業に特化しているので、強みを生かすため県が体験型観光を進めようとしている。2つ目は感動の仕方を育てること。残された教育の場としていなかのニーズがある。

\*中国では「農家楽」といって16000から18000戸の農家民宿ができています。こういった動きは世界的な動き。

\*体験型旅行での変化としては、ふわふわしていた子どもが生きている実感を感じるように変わる。目付きから違う。2泊3日くらいでも必ず号泣するくらい心を開いている。コミュニケーション力があがり、主体的に動けるようになる。行った後と前で調査しているが、数値化できないところではある。

\*観光をする側と、体験して欲しい側と、分けて考えた方が良い。観光を提供する側：観光は経済的に儲かる一大資源になりうる。観光する側：日常にないものを求めて行く。けれども、整備などし過ぎてしまうと、ニーズと合っていない状態になってしまう。

\*昔はグリーン・ツーリズムを楽しめる人がきていた。ブームになって裾野が広がったため、新しい客層とのマッチングができない。何もしないことを選択する人もいれば、体験を要求する人もいる。両極化している。客層によって選択できるプログラムの必要が？

\*根本的に農村観光は農村の荒廃を救えるのか？——に関して言えば、農村漁村が生産で成り立つのが前提で、その上に観光がある。ドイツは生産が成り立っており、観光メインではない。

\*他県のある農家民宿の方が、都市からのアクセスがよく現金収入が多いことから、お客様の受け入れに力を入れるために農業の作付を減らしたという。農林漁業を続けていくためのグリーン・ツーリズムでこういった、前提が逆転した現象もある。

\*農家民宿を始めたことによって、地域に2組の夫婦が移住して増えたという事例。そんな役割もあるのではないかな。

\*ヨーロッパでは日本よりずっと速いスピードで都市化してきた。日本はついこの間まで農村社会。なぜ日本の方が都市と農村の結びつきが小さいのか。

\*フランスには、農業を教える能力のある「教育ファーム」という制度がある。農山漁村の教育力に対する認識や環境政策が日本と異なり、都市農村間の理解度が高い。

【終えて】議論の区切りも見えぬまま、時計の針は終了時間を刺し、まとめの後、解散の運びとなった。話したことの芯は今ひとつはっきりしていなかったが、その分幅広い学びと、多くの人の「率直な実感」が感じられたように思う。このような勉強会も、都市農村間の相互理解をすすめる一因となるのではないだろうか。(文責・篠崎)